

苦海浄土

わが水俣病



百
年

苦海浄土一わが水俣病一

定価 460 円

昭和44年1月28日 第1刷発行

昭和45年10月5日 第8刷発行

著 者 石 牟 礼 道 子

熊本県水俣市日当嶺郷
郵便番号 867

発行者 野 間 省 一

発行所 株式 講 談 社
会社

東京都文京区音羽 2-12-21
郵便番号 112
電話 東京 942-1111 (大代表)
振替口座 東京 3 9 3 0

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

© Michiko Ishimure 1969

PRINTED IN JAPAN

★落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

NDC 914 19.4 cm

0095-165684-2253 (0) (学2)

目次

第一章 棒の海……………五

山中九平少年 6

細川一博士報告書 26

四十四号患者 35

死旗 43

第二章 不知火海沿岸漁民……………三

舟の墓場 64

昭和三十四年十一月二日 81

空へ泥を投げるとき 100

第三章 ゆき女きき書……………二五

五月 116

もう一ぺん人間に 140

第四章 天の魚……………一五

九竜権現さま 156

海石 178

第五章 地の魚……………一九三

潮を吸う岬 194

さまよいの旗 208

草の親 218

第六章 とんとん村……………三三

春 234

わが故郷と「会社」の歴史 239

第七章 昭和四十三年……………二九

水俣病対策市民会議 250

いのちの契約書 261

てんのうへいかばんざい 276

満ち潮 283

あとがき 288

不知火海沿岸地域地図 4

資料・契約書（昭和三十四年） 293

写真・桑原史成
見返し・秀島由己男
装丁・稲垣行一郎

第一章 椿 の 海

山中九平少年

繫がぬ沖の拾小舟
生死の苦海果もなし

年に一度か二度、台風でもやって来ぬかぎり、波立つこともない小さな入江を囲んで、湯堂部落がある。

湯堂湾は、こそばゆいまぶたのようなさざ波の上に、小さな舟や鰐籠などを浮かべていた。子どもたちは真っ裸で、舟から舟へ飛び移ったり、海の中にどぼんと落ち込んでみたりして、遊ぶのだった。

夏は、そんな子どもたちのあげる声が、蜜柑畑や、夾竹桃や、ぐるぐるの瘤をもった大きな櫨の木や、石垣の間をのぼって、家々にきこえてくるのである。

村のいちばん低いところ、舟からあがればとつきの段丘の根に、古い、大きな共同井戸——洗場がある。四角い広々とした井戸の、石の壁面には苔の蔭に小さなゾナ魚や、赤く可憐なカニが遊んでいた。このようなカニの棲む井戸は、やわらかな味の岩清水が湧くにちがいがなかった。ここらあたりは、海の底にも、泉が湧くのである。

今は使わない水の底に、井戸のゴリが、椿の花や、舟釘の形をして累々と沈んでいた。

井戸の上の崖から、樹齢も定かならぬ椿の古樹が、うち重なりながら、洗場や、その前の広場

をおおっていた。黒々とした葉や、まがりくねってのびている枝は、その根に割れた岩を抱き、年老いた精をはなっていて、その下蔭はいつも涼しく、ひっそりとしていた。井戸も椿も、おのれの歳月のみならず、この村のよわいを語っていた。

湯堂部落の入江の近くに、薩摩境、肥後藩の陸口番所、水口番所があったはずであった。入江の外は不知火海であり、漁師たちは、

「よんべは、御所ノ浦泊まりで、朝のベタ風の間に、ひとはしりで戻って来つけた」
などという。

御所ノ浦は、目の前にある天草である。その天草にむいて体のむきを左にすると、陸路も海路も薩摩と交わりあってしまうのである。

入江の向こう側が茂道部落、茂道のはしっこに、洗濯川のような溝川が流れ、これが県境、「神ノ川」であり、河原の石に乗って米のとき汁を流せば、越境してしまう水のそちら側の家では、かっきりと鹿兒島弁を使うのだった。

茂道を越えて鹿兒島県出水市米ノ津、そして熊本県側へ、国道三号線沿いに茂道、袋、湯堂、出月、月の浦と来て、水俣病多発地帯が広がり、百間の港に入る。百間から水俣の市街に入り、百間港に、新日窒水俣工場の工場排水口がある。

井戸のある平にそって、板壁、板の間の公民館——青年倶楽部が、朽ちかけて建っていた。潮風の滲んだこの小屋は、いつもがらんとして、久しく若者たちが使わないので、年寄りたちがひ

っそりと感じつづけてきた寂しさがこの建物に集められ、吹きぬけているようだった。青年たちが長く寄りつかない青年倶楽部は、村の生気をいちじるしく欠いてしまふのである。

若者たちが、村に、つまり漁師として、居つかなくなったのは、もうずいぶん前からのことのようにである。ことに、水俣病がはじまってからは、元にもどらない。どんなに腕のいい漁師でも、それを親から子へと伝授することはもうできないのだった。

年とった漁師たちは、むつつりとそのことを想っていた。彼らはひとりひとり、自分こそ鯛釣りの名人だとおもい、鉾突きの名人だとおもい、ボラ籠の仕かけに達意しているとおもっていた。そのひとりひとは、おのれの言葉どおり、他にありようもない名人にちがいはなかった。彼らのブライドは、暮らしを支え、魚市場を支え、水俣市民の蛋白源を支え、不知火海沿岸漁業の一角を支えてきたのだから。

板戸の外れっぱなしになっている青年小屋の、ガランとした床の上に、孫を連れて老漁夫が坐っていた。彼の耳はほら貝のように、不知火海にむけてひらいていたが、まなこは曇天のようにとろんとなり、おそらくその視力では網のつくろいさえおぼつかなくなったので、末の孫を当てがわれたにちがいない。

ひびわれた青年小屋の板の床には、彼の若気の思い出もあるはずであるが、老漁夫は、沖をみたり、孫をみたりして、不安げな、ぼんやりした顔をしていた。這いずりまわる孫は、彼の体力からいえば手にあまるのである。彼は半分ねむっているようであり、這い這いをやめて指をしゃぶったりして、ひとり遊びをしている孫とはもはや別の世界にいるようにみえた。

そんな老いた漁夫の顔は、わたくしの村の老百姓たちの顔つきともそっくりなのだ。彼らの伴たちも、娘たちも、もう、田んぼの水をいつひくか、いつ落とすか、ある夜には隣の畦あぜのどこを切つて自分の田んぼに水を落とすか、そうしたあとの畦を、どう塗りなおしておくか、などということも知らないのである。田植しろどきの代かきにやってくる耕耘機をしげしげとみてとりまき、老百姓たちは嘆声とも怨嗟えんさともつかぬ声をあげて、

「いやあ、今は、機械持つとる者が殿さんばい。昔は牛や馬なら、一代かかって働けば何とか買えよつたばつてんのう。機械買いきればのう、殿さんじゃが」

などといつて嘆息し、脛ひざに吸いついた蛭ひづをひつ外し、畦の上にこすりつけたりするのである。百姓たちが蛭をこすり殺すように、この老漁夫も、股の間に這ってきた舟虫を、杖の先でぶつりとつぶそうとしたが、舟虫の逃げ足はおぼろげな目つきで下される杖の先よりすばやく、お尻の先を半分潰されて、それは床の上にしみをのこしてころがり落ちてしまった。

年寄りたちは、子どもたちにゆずり渡しておかねばならぬ無形の遺産や、秘志が、自分たちの中で消滅しようとしている不安に耐えているようだった。朽ちてゆく青年倶楽部のように、彼らの生身もこころも、風化を続けていた。夏の海辺のどこを歩いても、そのような風が潜んでいた。

そんな一昨年の夏を過ぎたある日の午後を私はまた思い出す。一九六三年の秋を。

子どもたちはもうすっかり海からあがり、湯堂の赤土の坂道には秋の影が低くさし、野花がこぼれ、青い蜜柑の匂いが漂っていて、海からも家々からも、何の物音もきこえなかった。撫でた

ような静寂が、漁家の多いこの部落に訪れる時があるのである。

人びとは沖に出たり、町に下ったり、鶏たちも、とまり木の上で昼寝をしているにちがいがなかった。私は息を低くしながら、海にむいた部落の斜面の中ほどにある、九平少年の家の前庭に立っていた。

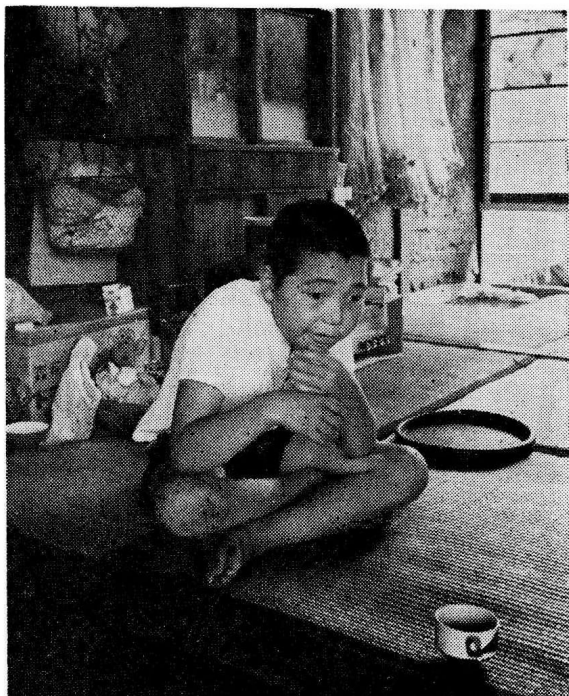
珍しく、少年は、家の外に出ていた。

彼はさっきから、おそろしく一心に、一連の「作業」をくり返していた。どうやらそれは「野球」のけいこらしくあったが、彼の動作があまりに厳肅で、声をかけることがためらわれ、わたくしはそこに突っ立ったままで、少年と呼吸をあわせていたのである。

九平少年は、両手で棒きれを持っていた。

彼の足と腰はいつも安定を欠き、立っているにしろ、かがもうとするにしろ、あの、へっぴり腰ないし、および腰、という外見上の姿をとっていた。そのような腰つきは、少年の年齢にははなはだ不相応で、その後姿、下半身をなげなく見るとしたら、彼は老人にさえ見えかねないのである。少年の生まれつきや、意志に、その姿は相反していた。近寄ってみればその頸すじはこの年頃の少年がもっているあの匂わしさを持っていて、青年期に入りかけている肩つきは水俣病にさえかからねば、伸びざかりの漁村の少年に育っていたにちがいがなかった。彼はちびた下駄をはいていた。下駄をはくということは、彼にとってひとかどの労働であることを私は知っていた。

下駄をはいた足を踏んばり、踏んばった両足とその腰へかけてあまりの真剣さのために、微かな痙攣さえはしっていたが、彼はそのままかがみこみ、そろそろと両腕の棒きれで地面をたたく



山中九平少年

ようにして、ぐるりと体ながら弧をえがき、のびかけた坊主刈りの頭をかしげながらいざり、今度は片手を地面におき片手で棒きれをのぼす。棒の先で何かを探しているふうである。幾遍めかにつつと音がして、棒きれが目ざす石ころにふれた。少年は目がみえないのである。

彼は用心深く棒きれを地面におくと、探りあてたその石ころを、しばらく愛撫するようにかがんだ膝の間で、その左手に握っているのだった。彼の右手は半分硬直していたから。拳大のその石ころは、彼の左手から少しはみ出し、それはまん丸い石ではなく、少しひよろ長い形をして、少年の不自由な左の掌によくなじみ、石の汗と、掌の汗がうっすらと滲み出ていた。――

石は、少年が五年前、家の前の道路工事のときに拾いあてていらい愛用しているものであることを私は後になって知るのである。彼はいつもその石を、家の

土間の隅に彼が掘った窪みにいれてしまつていた。ころげて遠方にゆかぬように――。半眼にまなこをとじて少しあおむき、自分の窪みをめざしていざり寄り、ふるえる指で探りあてて、石をしまう少年の姿は切なく、石の中にこめられているゴトリとした重心を私は感じた。

やがて彼は、非常に年とつた人間が腰をのぼして起きあがるように中腰になったが、左の掌に握りしめていた石を、重々しく空へむかつてほうり投げたのである。そして、彼のこれまでの全動作の中ではもつとも素早く、両腕で棒きれを横に振りはなつた。腰がぐんとゆれたが、少年はこらばなかつた。石はあらぬ方にごろりと落ち、棒が振られたときは地面にあつたので、それは、あたらなかつたのである。

少年は静かに石の落ちた方に首をかしげ、彼のバットで、そろそろと地面をまた探し出す。昼餉ひるげはとうにすみ、人びとは畑か、漁か、町に下り、部落全体がひとつの真空をつくつていた。石垣や家々や、細くまがつた坂道の間から、このような秋の午後は下の入江のポンポン船の音だの、年寄りたちが孫を呼ぶ声だの、コツコツと地面を掘る鶏の声だのがきこえてくるのに、九平少年だけが、ひとりで「野球」のけいこをしている午後の村は、彼のけんめいな動作が、この真空を動かしてゆく唯一の村の意志そのものであるかのように、ほかに動いているものはないもなかつた。地面から息をはなっている草々や、樹々や、石ころにまじつて私も呼吸をあわせていた。彼の動作にあわせて。少年はその頸すじにびっしりと汗をかいていた。

ながい間をおいた気がしたが、私は近より、少年の名を呼んだ。

彼は非常に驚いて、ぼとりと棒きれを落とした。なにか、調和が、彼と無音の部落とでつくり

あげていた調和が、そのときくずれた。彼は立ちすくみ、家の戸口を探すために方向感覚を統一しようとするらしくみえた。そして、まるで後ずさりに突進するように、戸口の内に入ってしまったのである。

それが、山中九平少年と私との、正式な、はじめての出遭いであった。そして私には、この少年とはほ同じ年齢の息子がいるのであった。激情的になり、ひきゆがむような母性を、私は自分のうちに感じていた。

山中九平について語るとき、水俣市市役所衛生課吏員たちは、困惑ともなつかしさともつかぬ表情を破顔させて、

「山中九平なあ、いやあ、あの九平しゃんにゃ、かなわんばい」

とおっしゃるのだった。市役所衛生課は彼には音をあげていた。ことに衛生課吏員、蓬氏は、彼について語るとき目を細め、この少年に一目おいているふうでさえある。

熊本大学医学部の水俣病患者の調査や検診が、水俣市立病院や、さらに現地部落でなされるとき、在宅患者たちにその通達をするのは市役所衛生課である。

衛生課は、患者たちを検診の場所に収容すべき専用バスを持っていた。専用バスの運転手、大塚青年は、あとうかぎり一軒一軒の患家近くまで、狭い部落の道乗り入れるのである。患家のすぐ近くに来てクラクションを鳴らす。すると、たんぼや、切崖や、杉木立や、海沿いの道に、人びとは五人、三人と集まっていたり、家々の路地をゆっくりと出てくるのだった。

母親や、祖父母に抱かれたり、背負われたりしてくる、首のすわらない胎児性水俣病の子どもたちや、おぼつかない足つきの成人患者たちが寄りそって、海辺や田んぼのわきの道に立っているそんな風景は、やはり、ふつうの田舎のバス停の風景とは異なっていた。

そばを通る人びとは、いくらか身を引く形で、子どもたちの異形の集団をみて、言葉少なに声をかけてとおり、それはあるときは、人びとのやさしさともみえたが、そうでないときもあるのだった。

子どもたちと人びとが立っているというだけで、田んぼも、泥はねの道も、波の光も凝固し、人びとは実に控えめな、とまどったような、心を深く屈折させたような顔をして、その上に人なつこい笑顔をいつも浮かべていた。

大塚運転手は、この人たちに、

「よう、とも子ちゃん、来たかい」

などと、威勢のいい声をかけるのだった。

そして、この青年が力を入れて、ボタンと扉をしめると、バスの中に、微妙な変化が、外の風景の中にいたときの、不安げな様子とはちがう変化が起きるのを私はいつも感じていた。それはおおかた、口のきけない子どもたちのあげる、かすかな声や、なめらかにほぐされてくる大人たちの会話であった。十歳前後になった子どもたちは、母親や祖父の腕の中で、たいがい首を仰向けにがくと背中の方にたれて、バスの外の景色を感じていた。子どもたちの視力は、まるで見えなかったり、視野が極度に狭められていた。発語を阻止されている子どもたちのあげる微妙な